
銀魂×魔法少女リリカルなのは 銀髪 of 侍と魔法少女 リターン

白い奇術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂×魔法少女リリカルなのは 銀髪の侍と魔法少女 リターン

【Nコード】

N5465BA

【作者名】

白い奇術師

【あらすじ】

20年前に宇宙からやって来た『天人』の台頭と魔刀令により、かつて隆盛を極めた侍は衰退の一途をたどっていた。そんな時代に決して曲げぬ侍魂を持った男が1人その名は坂田銀時。万事屋を営むこの物語の主人公である。彼のもとで働く志村新八と神楽と一緒ににぎやかな毎日をおくっていた。ひょんなことからアニメ『魔法少女リリカルなのは』のに行ってしまう万事屋一行。魔導師達と共に銀時は暴れまくる。

(赤夜叉さん勝手に掲載してゴメン)

〈第一章〉第一訓：何がキツカケで何を好きになるかわからない（前書き）

退会してしまった、赤夜叉さんの代わりに、赤夜叉さんが執筆した銀魂×魔法少女リリカルなのは 銀髪の侍と魔法少女を載せたいと思って執筆しました。このまま掲載するか、否かは読者の皆様に決めて貰うつもりですどうぞよろしくお願いします。

〈第一章〉第一訓：何がキツカケで何を好きになるかわからない

大江戸ドーム。

今ここでは人気絶頂のアイドル寺門通のライブが行われていた。

「みんな〜！今日は私のコンサートに来てくれてありがとうきびウ
ンコオオ〜！」

ステージに立つのはアイドルの寺門通。

「とうきびウンコオオ〜！」

観客がお通の声に応える。

「それじゃあ最後の一曲『お前の母ちゃん 人だ？』〜！」

最後の一曲をお通が熱唱し、ドームの中の熱気は最高潮に達した。

*

ライブが終わり、ドームの中から沢山の人が出てくる。

「いや〜今日も盛り上がったなあ！」

と口を開いたのは寺門通親衛隊のタカチン。

「そうだなあ。お通ちゃんのライブは最高だよ！」

「なあ軍曹：アレ？軍曹？」

タカチンは周りをキョロキョロ見て人混みの中、軍曹を探す。

「軍曹ならそこで携帯いじってますよ」

一人の隊員が指差す。

そこには携帯の画面を見ながら二やついてる軍曹がいた。

「何やってんだ軍曹のやつ？まさか、また女とメールしてやがんのか！？」

タカチンが額に血管を浮かべる。

「いえ違います。なんか最近、リリなんとかってアニメにハマったらしくて、暇さえあればそのアニメの待ち受け画像を見てるんですよ」

「アニメだとオ！？軍曹のくせに何やってんだ！？」

タカチンが軍曹に掴みかかろうとした時。

「ぎゃあああああ！！」

軍曹が悲鳴を上げた。

見ると一人の男が軍曹の鼻の穴に指を突っ込んで体を持ち上げていた。

「……た……隊長オオオオ！！！！」

隊員達が恐怖に駆られた声を上げた。

軍曹を持ち上げている眼鏡男は寺門通親衛隊隊長・志村新八。普段は地味なツツコミ眼鏡だが、寺門通の事になるとスウターがぶっ壊れるくらいの戦闘力を発揮する。

「軍曹オオオ！寺門通親衛隊隊規十二条を言ってみろオオ！！」

新八は鬼の形相で軍曹を睨みつける。普段の新八にはない重い威圧感を放っている。

「いただただっ！！」たっ、隊員はアニメ等の二次元の作品を観ることなかれ』であります！」

痛みと恐怖に怯えながらも軍曹は答えた。

「その通りだ！軍曹オ！貴様は幹部でありながらこれを破った！よっ……」

新八の目がカツと見開かれる。

「鼻フックデストロイヤーファイナルブラスターの刑に処す！！！！」

叫びながら新八は軍曹の頭を地面で擦り、そのまま一本の太い木に向かって投げた。

「ぶぎや！！」

軍曹は木にぶつかり、ズルズルと地面に落ちた。

「軍曹オ！貴様の持つてるそのアニメのDVDやグッズは全て没収だア！全部俺が売ってやる！！」

*

約一時間後。

軍曹は泣く泣く全てのアニメのDVDとグッズを新八に渡した。渡した後、軍曹は泣きながら帰っていった。

新八はDVDのパッケージを見た。そこには一人の少女が写っていた。

アニメ『魔法少女リリカルなのは』の主人公の高町なのは。

新八はパッケージに写ってる、なのはを見て顔を赤くした。

（あ…アニメなんて…アニメなんて…！！）

DVDを持つ新八の手が震える。

（く…！ありがとうございました！！）

新八は頭を下げて心の中で礼を言った。一体誰に言っているのだろう。

それで軍曹から没収した『リリカルなのは』のDVDとグッズを売らずに家に持って帰った。

*

翌日。

ここは江戸の歌舞伎町。この町に『万事屋銀ちゃん』というなんでも屋がある。

「つーかよお。主人公の俺の出番がこんなに遅いつてのは問題じゃねーの？」

ソファアに座って疑問を言うのは坂田銀時。白髪の天然パーマがトレードマークのこの物語の主人公である。

「そうアル。新八なんてダメガネより私達の出番を増やすアル！」

酢昆布を食べながら言ったのは神楽。宇宙最強の戦闘民族『夜兔族』の一人。

「おはようございます」

玄関の扉が開かれて新八が入ってきた。

「新八。なに主人公の俺より先に登場してんだコノヤロー」

「先に登場したって地味キャラはいつまで経っても地味キャラアルヨ」

銀時と神楽は新八を睨む。

「いや僕に文句言わないでくださいよ！作者に言ってください！それと地味キャラって言うな！！」

二人にツッコみながら新八はソファに座った。

「よし。新八も来たことだし、仕事に行くか」

「オイ！『新八』と書いて『じみ』って読んだか！？」

立ち上がりながら新八はツッコんだ。

*

銀時達は源外の所へ向かっていた。

「源外さんから仕事の依頼？どんな依頼なんですか？」

銀時の横を歩く新八は首を傾げた。

「なんでも新しい発明品を開発したから来てくれってよ」
メンドくさそーに銀時は答えた。

「どーせロクな発明品じゃねーよ」

「早く済ませて定春と散歩に行きたいアル」

銀時の隣で神楽は傘をさして酢昆布を食べてる。

そんな会話をしてるうちに万事屋トリオは源外の工場に到着した。

「おい、じーさん」

銀時が工場の中に声をかけた。

「おー、来たか銀の字」

工場の中から一人の老人が出てきた。

平賀源外。江戸一番のからくり技師である。

「よし。お前ら中に入れ」

源外に言われて銀時達は工場の中に入った。

「「「おおー！」「」」」

中に入って三人は驚きの声を上げた。

工場の中には大きな装置があった。

「おい、じーさん。何だよこいつぁ？」

「コイツはな瞬間移動装置だ」

「瞬間移動装置？」

新八は首を傾げた。

「原理はターミナルと同じだが、コイツは生身の人間を移動できるように作ってあるのよ」

「うおおお！スゴイアル！！」

神楽は一人興奮して装置をペタペタ触る。

「神楽ちゃん。何が起こるかわからないから触っちゃダメだよ」

新八が注意する。

「んだよダメガネ」

渋々、神楽は装置から離れる。

「で？俺達にどうしろってんだ？」

銀時が話を戻す。

「お前達に装置の中に入ってもらって瞬間移動してもらおう」

「俺達に実験台になれってか？」

銀時は目を細める。

「他に頼める奴がいねーんだ。金はちゃんと払うから頼むよ銀の字」

「……………しょうがねーな」

頭を掻きながら銀時は承諾した。

「いくぞ新八、神楽」

「はい」

「キャッホオウ！」

神楽だけテンションは高かった。

ふと、銀時は足を止めて後ろにいる源外に振り返った。

「じーさん。装置の中に変なボタンとかねーだろうな？」

「ねーよ。んなもん。さっさと中に入れ」

「わーったよ」

銀時達は装置の中に入った。装置の扉が重い音を立てて閉じた。

「それじゃ装置を作動させるぞ」

源外は装置のスイッチを押した。

装置の中が赤くなる。

「おおっ！中が赤くなったアル！」

神楽は一人わくわくしている。

「楽しそうだな。おい」

銀時はため息をつく。

「ちなみに銀の字。どこに移動するかは俺にもわからん。気をつけろ」

「ジジイイ！そういうことは先に言えエエエ！」

銀時が怒鳴った直後。

ビービー

突然、警報が鳴り響いた。

「おい！ジジイ！何だよこれ！？」

銀時は装置の外にいる源外に怒鳴る。

「ん？装置が何かに反応してやがる！」

「ジジイ！また欠陥品作りやがったな！」

装置の中で銀時は怒鳴る。

「銀さん落ち着いてください！」

「これが落ち着いてられるかア！」

「ヘルペス！ヘルペスミシー！！」

神楽が頭を抱えて叫ぶ。

「ヘルプミーだよ神楽ちゃん！」

神楽にツッコむ新八。

「銀の字！お前ら何か変な物持ってないか？」

「何も持ってねーよ！」

源外に怒鳴る。

「銀さん！とりあえず装置の外に出ましょう！」

新八が歩き出した時。

カタン

新八の懷から何かが出て床に落ちた。

「ん？」

銀時と神楽は床に落ちた物を見た。

新八は”しまった”という顔をして汗を流す。

床に落ちた物は『魔法少女リリカルなのは』のDVDだった。

「新八……」

銀時はジト目で新八を見る。

「お前アニメオタクにもなったアルか？マジキモイアル」

神楽はぺつと唾を吐く。

「何だとオオオオ！！」

新八がキレる。

「銀の字！そのDVDだ！DVDに装置が反応してるんだ！！」

「DVD！？何でDVDに反応してんだよ！？」

騒いでる間にも装置内の赤い光が強くなる。

バチツという音と共に装置の中から強い光が発した。だんだん光がおさまる。

源外が装置の扉を開ける。中に銀時達の姿はなく、床に落ちてるDVDだけがあった。

「厄介な事にならなきゃいいがな」

誰もいなくなつた工場で源外は一人呟いた。

*

「ん」

ゆつくり^{まぶた}瞼を開けて銀時は目を覚ました。

「ん？」

上半身を起こす。周りを見渡した。どこかのビルの屋上らしい。そして空は暗く月が出ていた。

新八と神楽の姿はない。

「どこ、どこ？」

〈第一章〉第一訓：何がキツカケで何を好きになるかわからない（後書き）

注意 オリジナルと違い前文 後文 質問コーナーなどは一切ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5465ba/>

銀魂×魔法少女リリカルなのは 銀髪の侍と魔法少女 リターン

2012年1月14日23時48分発行